猫蓑通信

第110号
特大号
令和元年
（2019年）
7月20日発行
（年4回発行）

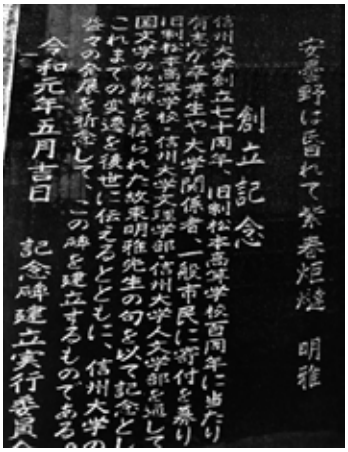
信州大学創立七十周年記念碑建立
碑の表は東明雅先生の発句
安曇野は昏れて紫春炬燵

信州大学旧文理学部と人文学部の卒業生有志が、大学創立七十周年、前身の旧制松本高等学校開校百周年の記念碑を、同大学松本キャンパスの人文学部前に建立し、今年五月三十一日に除幕式が行われた。碑の表には、猫蓑会設立主宰・東明雅先生の発句「安曇野は昏れて紫春炬燵」が、先生の遺墨によって刻まれている。

六月一日付けの「信濃毎日新聞」「市民タイムス」の両紙は、明雅先生が旧制松本高、信大文理学部、人文学部を通じて国文学教授として教壇に立たれたこと、また在職中、学部の壁や教員学生の区別を越え、松本市民にも開放された「信大連句会」などの活動を通じて、地域の文芸振興にも貢献されたことを伝えている。

両紙によれば、当日の除幕式は同窓生と在学生が交流する「ホームカミング」イベントの一環として行われた。記念碑建立の会は同窓生有志が作り、明雅先生の地域活動と関わりのあった市民も含む有志からの寄付で碑が建立された。会代表の鈴木崇夫氏は、「信州の地で人文学を学ぶ人たちを見守るような句だ」と挨拶され、また人文学部長の早坂俊廣氏は、この句から「歴史の重みを感じ、次の百年に向けて歩み出す勇気をいただいた」と話された。また昭和三十一年卒業の小口房子さんは「東先生のいる

写真提供：東 郁子



裏面にも同じ句が刻まれ、建立の趣旨、経緯が記されている

●目次●

信州大学創立七十周年記念碑 1
【ミニーツ連句】
東明雅先生の来し方……青木秀樹 3
第百四十七回猫蓑会例会
根津芦丈翁五十回忌追善歌仙八巻 4
平成三十年俳諧芭蕉忌正式俳諧 8
祖父、苧庵芦丈の五十回忌に……根津忠史 9
江戸時代陶磁器散歩……宇田川肇 9
第百四十二回猫蓑会例会
平成二十九年度猫蓑会総会作品歌仙六巻 12
岐阜県文芸祭に参加して
短歌行「繊月の雫」……鈴木千惠子 15
第百四十三回猫蓑会例会
明雅忌源心八巻 16
平成二十九年俳諧芭蕉忌正式俳諧 19
事務局だより 20

●「猫蓑通信」発行遅延のお詫び

昨年一月、「百八・百九合併号」を発行して以後、後続号を発行できぬまま一年半が経過してしまったことを、心からお詫び申し上げます。今号には、未掲載だった例会作品三回分を順不同で掲載しましたが、まだ多くの作品が未掲載のままになっています。

遅延はパソコンや編集・デザインシステムのトラブル、私の健康上のトラブルなどが相次いだ結果ですが、今号から編集体制を強化し、今後当分の間、発行間隔を狭めるとともに増ページを続けることで、未掲載を解消してゆく所存です。何卒ご寛恕くださいますようお願い申し上げます。（鈴木了斎）

信大で学ぶことができて幸せだった」と話された。引き続き、参会者の懇談会が行われた。

記念碑は高さ約一・八メートル、幅約一メートル。同学部棟に隣接する広場に立つ。

この発句は明雅先生の代表句のひとつだが、『猫蓑庵発句集』には、

安曇野（あづみの）は昏れてむらさき春炬燵　明雅
山葵（わさび）田ひとつ谿の奥処に　時彦
別れ霜童女の頬のふくらみて　照敏

という形で、第三までの付合を含めて収録されている。草間時彦、平井照敏の両氏は、ともに当時の代表的な俳人。草間氏は明雅先生刊行の『季刊連句』にも毎号寄稿された。先生は『猫蓑庵発句集』のあとがきに、草間氏の句会「鵯の会」の「お陰で私はひそかに発句の作り方を勉強することが出来た」とお書きになっている。そういう意味でも、先生にとって思い入れの深い句だったのではないだろうか。

【ミーツ連句】

ネット動画による連句普及の試み

https://www.youtube.com/watch?v=-MV_belp0_o

日本連句協会では、インターネットのユーチューブ（youtube）動画を通じて連句普及をはかる企画「ミーツ連句」をスタートさせた。「各界でご活躍の表現者の皆さまに連句を体験していただき、その一部始終をドキュメンタリータッチにまとめ youtube に動画を公開します」（連句協会オフィシャルサイトより）という趣旨。

その第一弾、シンガーソングライターの小島ケイタニーラブ（小島敬太）さんをお招きする企画に猫蓑会が協力し、捌き手として坂本孝子、連衆に鈴木了斎、鈴木千恵子、宇田川肇、連句協会の広報企画担当理事山中たけをさん、ケイタニーラブさん、の六人が、四月七日午後に江東区芭蕉記念館に集結した。

孝子さんの発句で始まり、夕刻までに満尾した歌仙は以下の通り。

左から三人目が小島ケイタニーラブさん

歌仙「菜の花や」　坂本孝子　捌

菜の花や房州の海鳴りやまず　孝子
湘南ナンバー風光る中　敬太
指なしの春手袋を脱ぎ捨てて　了斎
熱い珈琲匙でぐるぐる　千恵子
初月夜敬礼交す警備員　肇
非常階段睨む蟷螂　たけを
ウ　明日の運帰る燕に聞いてみる　斎
だめな男に惚れるわたくし　千
母は言ふお前の父は先の王　肇
エレキのリフに狂ふドラムス　を
生ビール五臓の虫を黙らせて　太
夏の霜降る僧院の廊　を
赤と黒市松模様どこまでも　斎
メニエル病は突然に出る　千
目化粧の楽屋お化けになり果てて　孝
百歳時代生きて矍鑠　斎
蜆塚遺構を襲ふ飛花落下　太
素焼の皿に青饅を盛る　斎
ナオ　オフ会はお伊勢参りに犬も連れ　を
バスの中ではすでにへべれけ　肇
脳内に多幸物質充満し　千
天才のみが解ける暗号　肇
ご用金埋めた筈の秘密地図　千
粗品ですがと目を伏せる夜　斎
友情にマサイは妻をさし出だし　肇
豹の毛皮で通す我侭　を
保護色を纏ひ続ける処世術　斎
逢魔が時を過る地下鉄　太
ギザギザの街の谷間にぬつと月　斎
芭蕉に雨が降れば胸打つ　太
ナウ　残暑なり盥に吾子を湯浴みさせ　を
国庫の補助で得なリフォーム　肇
ここ三年誰も行かない資料室　仝
源氏写本を狙ふ好事家　斎
繚乱の花に覗ける水鏡　孝
肩にかかれば融ける淡雪　肇

連衆　小島敬太　鈴木了斎　鈴木千恵子
宇田川肇　山中たけを

ケイタニーラブさんは、以前連詩に参加した経験はあるが、連句ははじめてとのこと。それにもかかわらず、日頃、言葉の創作にかかわるプロだけに、孝子さんの指導よろしきを得て、無事に脇句を含む五句が治定された。

敬太さんにとってこの体験は、辛くとも楽しい、とても印象深いものだったようだ。またぜひ挑戦したい、と後日おっしゃったとのこと。

動画冒頭に流れ、末尾に演奏光景が映る歌は、満尾後にアコースティックギターを奏でつつ敬太さんが即興で弾き語りしたもの。歌仙中の句や連衆名を織り込み、当日の体験への感謝を歌って、連句的な挨拶の心に溢れている。

このyoutube動画は、パソコン、スマートフォン、ネット連動テレビなどで、ブラウザーの検索窓に「ミーツ連句」と入れて検索すると視聴できる。短縮版より、ぜひ十分間の完全版を。

東明雅先生の来し方

青木秀樹

日本社会の高齢化がすすんでいることを実感している方が多いと思います。猫蓑会も同じで、東明雅先生に連句を直接教えられた人が年々減り、先生の謦咳に接した人よりも、著作物などで接した人が多くなっているのが現状です。これはある意味では、明雅先生がこの世に残そうとした連句という文芸を、多くの方が継承しようとしている証しでもあるでしょう。

東明雅先生は大正四年（一九一五）に熊本市で誕生、平成十五年（二〇〇三）十月二十日に満八十八歳で逝去されました。東京帝国大学文学部国文科を卒業されてから、文部省宗教局、東京府立第一中学校教諭、松本高等学校教授、信州大学文理学部助教授・教授、人文学部教授を務められ、昭和五十五年（一九八〇）定年退官されるまで、松本暮しが三十五年になります。

猫蓑会は先生が逝去されてから偲ぶ会を催し『安曇野は昏れて紫――猫蓑庵東明雅先生追悼集』を発行しましたが、信州大学の教え子を中心とする方々は『東明雅先生追悼集　鶴一羽』を発行されました。この追悼集の中に、先生が退官四年後の昭和五十九年三月、信濃毎日新聞に十回に分けて連載された「来し方の記」が転載されています。これを読むと、明雅先生の研究の変遷、連句との出会い、そして連句への使命感がわかるように思います。全体が長いので私なりに要約してご案内します。

〈東明雅先生「来し方の記」の要約〉

・明雅先生は第五高等学校時代から近世文学に興味を持ち、大学では江戸文学を専攻、卒業論文は「初代並木五瓶の研究」、指導教官は守随憲治先生だった。

・昭和二十二年、日本一の西鶴本の所蔵家である横山重先生を訪ね、歌舞伎研究から西鶴研究に転身。横山先生の原本主義、校訂第一主義の教えを受け、岩波文庫『日本永代蔵』『好色五人女』を出版。

・『日本永代蔵』は西鶴では最も多く原本が残っている作品であり、全国の図書館などにある三十本以上の資料から底本を選んで校訂を行った。

・昭和二十七年、伊那の俳人根津芦丈翁を、談林派の俳人野口在色の件で訪ねた。それから十年後の昭和三十六年、芦丈翁が蕉風伊勢派の俳諧を伝える唯一の人と知り、信州大学に招いて連句の話をしていただく。これをきっかけに信州大学連句会が結成され、ほぼ毎月一回、芦丈先生の指導を受け、これは昭和四十二年三月まで続いた。それまで衰退していた連句の伝統を何とか守らなければならない、という使命感に燃えた。

・昭和五十五年、定年退官を迎えた。「世をしのぶ仮の姿」の大学教授から「俳諧師」に転身した、その喜びを今なお忘れ得ない。

かなり要約させて頂いたが、東明雅先生の連句にかける情熱がおわかりになるでしょうか。

第百四十七回猫蓑会例会
根津芦丈翁五十回忌追善歌仙1～4

天竜川の座

脇起歌仙「秋の海」　青木秀樹　捌

秋の海縮め弥彦に陽の残る　芦丈仏
栗名月の宴待ちつつ　秀樹
松手入れ済ませし隣家旅に出て　忠勝
鏡の中のわが身見る猫　智子
無造作に木綿のシャツが掛けてあり　良子
風炉茶でもまた椅子席とする　ひろみ
ウ 冷し酒政治談義の切りもなく　敦子
かつての闘士ただの友達　幸子
甘酸つぱい思ひ綴られ雑記帳　み
今でも彼は気付かないまま　勝
停車場でばつたりと会ひそれからは　良
挙動不審か職務質問　敦
御神渡月はすべてを照らしぬて　勝
雪達磨の目とけて垂れ目に　智
黒柳徹子挨拶話題なり　良
ワイド番組取材する記者　敦
どこよりも裏の空地の花が好き　幸
飼うて自慢の鶯の声　良
ナオ わさび田に水滔々とあふれをり　み
醤油顔なのソース顔なの　樹
土産にと選ぶ小皿は色違ひ　智
転ばぬやうに歩く坂道　み
十年の先読む君を杖となす　良
老老介護ゲイのカップル　勝
裏長屋売れぬ役者の仮住ひ　み
宅配弁当足りる栄養　敦
初市は祝儀相場の値をつけて　勝
列なして行く托鉢の僧　智
山の端にぽつかりと月顔を出し　良
図鑑開いて終へる茸狩　敦
ナウ 運動会地区別リレー競ひ合ふ　幸
太鼓の音の遠く近くに　良
外交に嘘あれこれとあるらしく　勝
建国記念日揚げる日の丸　敦
ご退位の陛下を賀して花万朶　樹
野遊離れ着陸のヘリ　智

連衆　和田忠勝　大塚智子　本屋良子
江津ひろみ　武井敦子　飯島幸子

狐林（きつねばやし）城の座

脇起歌仙「山の灯」　根津忠史　捌

眠り落ちし山の灯月は天心に　芦丈仏
下り鰻の梁掛ける頃　忠史
客人は古酒の深みを好むらん　静司
歌つて見せて拍手貰ふ子　淳子
知恵の輪をほどく楽しみ伝授して　美智子
固まつてゐる寒猿の群　泉子
ウ わいわいと野沢菜洗ふ外厨　あき子
地産地消が売りのこの店　節子
輸入車が自慢の奴に誘はるる　淳
迷ふ仕草も思ひやりです　泉
意に添はぬ見合ひ今度も親の義理　司
靴擦れ予防新しい靴　淳
ジョギングに松の涼しき御堀端　あ
ＤＪポリス汗をかく月　泉
ともかくは一人になりて本を読む　智
豆念入りに選ぶ珈琲　淳
復興の駅舎見おろす花大樹　節
島影眩し春凪の岬　あ
ナオ 遠足のリュックにみんな名前書く　泉
パンダの前でこころうきうき　節
憲法を変へようと言ふ動きあり　司
老いたる者も右も左も　淳
その昔奴は悪餓鬼今教師　司
闇に紛れて奪ふ唇　淳
王冠を捨ててもいいと抱き合ひ　節
ネクタイ外し亭主くつろぐ　智
マニュアルで仕切るあんたはＡ型か　泉
標準時間日本の臍　司
栗名月少し傾く織部皿　あ
これはやつぱり秋渇きかと　泉
ナウ 棚田にて色無き風に身をさらす　あ
掃き清めたる宝前の道　智
ボリュームをせいいつぱいに選挙カー　司
ゆつくり削る赤い鉛筆　あ
花盛り本陣問屋伊那の里　史
巣立ちの鳥の強い羽ばたき　節

連衆　小林静司　上月淳子　聖成美智子
青木泉子　岩崎あき子　長坂節子

高遠城の座

脇起歌仙「頂上に」　鈴木了斎　捌

頂上に道あつめたる野菊かな　芦丈仏
　への字への字と初鴨の来る　了斎
馬売つてカレーライスの十三夜　蓼艸
　ラッキーチャーム身につけてをり　墨
校庭に並ぶ大中小の友　たけを
　遺伝するらしてんとむしの斑　美友紀
ウ
軽井沢高原教会ホトトギス　艸
　謎のヴェールに包まれたひと　を
汝(なれ)死なば汝(な)が骨欲しと囁かれ　艸
　灰にさはれば微かなる熱　斎
二代目のろくろ回す手皺もなく　墨
　話題の映画かかるシネコン　紀
凍月にゴジラは吼えて帰りゆく　を
　お国訛の抜けぬ先輩　紀
日本人「は」と「が」の違ひ知りもせず　墨
　大吟醸はうまい気がする　紀
散り敷きて花の浄土となりゐたり　艸
　香りばかりが残る春暁　墨
ナオ
抱かれたる夢か記憶か朧にも　斎
　若き日の恋どれもいい恋　紀
嬰の手の小さき指にはちさき爪　墨
　猫がまあるく眠る片隅　紀
次の世は人になれよとつぶやきぬ　艸

平成三十年十月十八日
江東区芭蕉記念館

出航を待つ時の短さ　を
年越の街に笑顔の数かぞへ　仝
　雪はゆたかに降りつもりつつ　艸
渾身のギターのリフに歪(ひず)む部屋　を
　負けず嫌ひで一芸をなす　紀
満月は西に入る日を追ひ続け　仝
　金属疲労金庫冷ややか　艸
ナウ
危絵を売る算段の濁酒　仝
　万博誘致願ひ火祭　墨
ボランティア足らず補ふアルバイト　を
　アホーアホーと貌鳥の鳴く　艸
人の来ぬ山の奥なる花盛り　斎
　遠く小さく仰ぐ連凧　を

連衆　川野蓼艸　竹中墨　山中たけを
　奥野美友紀

経ヶ岳の座

脇起歌仙「島の灯」　坂本孝子　捌

永き夜を何して更かす島の灯ぞ　芦丈仏
　孤月を渡る雁の鉤形　孝子
兎毛筆(うのけふで)優しき鹿の目を入れて　蕉肝
　ストレッチする広き板の間　未悠
坂登るタンデムの息ぴつたりと　壽子
　宅配便は汗拭ひつつ　徹心
ウ
田草取り自給自足の手際よく　敏枝
　やさぶらうには嫁にやれない　心
地の果の外人部隊にゆく貴方　悠

紡いだ夢の話紡いで　壽
宵の月風に吹かれて着ぶくるる　枝
　焚火の灰に掘り出した藷　肝
鑿さくさく仏師は智者よ飛騨の里　肝
　百科事典は漢の頃より　心
恐竜の子守歌かも波の音　肝
　カフェオーレにて少しくつろぎ　壽
花の雲いまD51を撮るチャンス　悠
　ぴしりと打つた耕牛の尻　肝
ナオ
春雷の突き当たりたる城の垣　壽
　一千万はどう使はうか　心
天才の脳の欠片を探す旅　壽
　ノーベル賞を受ける気はなし　肝
時告ぐる教会の影細長く　壽
　木偶の右足ゆるくなる糸　肝
ご当地はお国踊りの継がれきて　枝
　切子の杯に薄紅の酒　仝
月高し連れはモデルかスパイかも　肝
　雌に命を賭ける蟷螂　心
秘め事に似ていそいそと茸採　悠
　オセロ少年勝つて爽やか　仝
ナウ
高西風に漁翁は網を繕ひて　枝
　含む飴玉喉に効くらし　孝
独逸語を得意に巡る古書の市　壽
　スクランブルに人種交差す　悠
ふる里の落花を浴びて一家族　心
　子等は靴脱ぎ駈ける野遊　枝

連衆　近藤蕉肝　棚町未悠　杉山壽子
　佐藤徹心　箭内敏枝

第百四十七回猫蓑会例会
根津芦文翁五十回忌追善歌仙5～8

駒ヶ岳の座

脇起歌仙「古代の人」　林 転石　捌

土窯石窯古代の人の秋思ふ　芦丈仏
発掘溝に落つる山栗　転石
月の酒もつてのほかを賞味して　美奈子
お品書きには一言を添へ　遊眠
スマホからイヤホンで聞くジャズソング　吉文
摩天楼にも寒風の音　鄭和
ウ 社会鍋あどけなき児の２$札　一枝
ベンチに座る女猿曳　文
合つた目が黙つてついて来いと云ふ　眠
夢ならあなた裕ちやんになれ　和
マドロスの咥へたばこのセクシーさ　眠
胸毛の薄さ運も尽きたり　和
国境を越え来て踏むは夏の霜　眠
金色涼し厨子の御仏　枝
米中のはざまに漁夫の利を拾ふ　奈
調書すつきり踊る筆先　眠
地の塩になりし義侠の肩に花　枝
しきりに傘へかかる淡雪　和
ナオ 山手線気づけばぬくき匂ひして　文
パステルカラーのフレアスカート　枝
どこまでも昇る階段地上へと　眠
非常口にはちやんと矢印　文
ぼくの命君にあげると云はれたい　奈
ピンヒールにて傷の深々　眠
わが恋は減価償却できなくて　枝
磔刑の丘風のしばれる　和
白鳥のこふこふと啼く北の湖　奈
オスロの街でカッフェ楽しむ　枝
ノーベル賞今年こそはとたのむ月　和
ご遷宮とて神かつぎ出す　文
ナウ 玄関にみせばやを置く父百寿　和
ドラッグストア全て揃へる　文
のび太にはタケコプターがあるんだよ　枝
雲突き抜けて宇宙周遊　和
咲く花に大悲大慈の祈り込め　石
昆布青海苔奉納の棚　眠

連衆　鈴木美奈子　内田遊眠　永田吉文
高山鄭和　西田一枝

黒川山の座

脇起歌仙「山の灯」　武井雅子　捌

眠り落ちし山の灯月は天心に　芦丈仏
稲架襖にもやはらかな影　雅子
走り蕎麦十人分も茹で上げて　弘子
子供部屋から楽しげな声　郁子
街をゆくブラスバンドは整然と　霞
スノータイヤのバスとトラック　文伸
ウ 金閣寺碧を極める竜の玉　通斉
身振り手振りで話す姑娘　斉
動画より早くあなたに会ひたいよ　伸
ああバッテリー突如切れたり　弘
本棚のシェイクスピアを並べ替へ　斉
三人娘今はそれぞれ　伸
お百度を踏む母親に夏の霜　弘
未来果てなき玫瑰の海　霞
大漁旗掲げ沖より船帰る　郁
笑顔で交す日々の挨拶　霞
みちのくへ誘ひ合せて花の旅　郁
双眼鏡で巣立鳥追ふ　弘
ナオ 住み侘て円匙万能耕しに　伸
床の間にある眉唾の壺　斉
窯変をためつすがめつ誠之助　霞
文台捌き恙なく終へ　弘
袖の香のほのかに立ちて人恋し　霞
ホットウィスキー忍び逢ふ夜　仝
誰よりも熱きカップルゲレンデに　弘
見ざる聞かざる言はざるの猫　斉
AIが何でも面倒みてくれる　郁
カレードスコープ覗く楽しみ　霞
望の月去り行く人と来る人と　伸
土産に貰ふ籠の松茸　斉
ナウ 老教授下り鰻を待ちかねて　伸
ノーベル賞は予定調和に　弘
折紙はきちんと角を合せ折り　霞
健康診断何事もなく　斉
花の宴夢幻のこの一路　雅
揺るるともなく揺るるふらここ　郁

連衆　松原弘子　東郁子　高塚霞
若林文伸　菅原通斉

戸倉山の座

脇起歌仙「紅葉踏む」　佐々木有子　捌

人の垢に染まぬ古刹の紅葉踏む　芦丈仏
名残の月の昇り来る頃　有子
川風も路地吹く風も露けくて　待雪
駈けゆく子等の声はちりぢり　暁巳
制服の袖の釦が一つとれ　あや
つける楽しみまた日記買ふ　俊子
ウ 食卓で毛糸編む妻吾読書　正夫
倍に太つた君もかはいい　や
エコノミークラスのシート通路側　雪
行きも帰りも見たい富士山　巳
南溟に探す鰻の産卵処　雪
夕焼空を鳶旋回　夫
月耿耿決戦ナイター闌に　巳
ポップコーンにコーラバーガー　仝
税金を老と幼とが取り合ひて　俊
埼玉県はかなり住みよし　や
何もかもこぢんまりした花の宿　仝
御朱印帳に蝶のスタンプ　雪
ナオ 啄木忌心ゆくまで呑み交す　夫
空地となつた分校の跡　や
逆立ちをしても吹けるよリコーダー　雪
愛を注がぬ母もゐるとか　俊
医学部は女子学生に厳しくて　巳

平成三十年十月十八日
江東区芭蕉記念館

実験マウス瞳つぶらに　仝
ぺつたりといちたすいちの冬籠　や
お疲れならば粥を炊かうか　夫
いつの間に穴を開けたる錆落し　俊
メルカリで売りメルカリで買ふ　雪
端渓の海に浮かびし今日の月　夫
助役の台詞消えた地芝居　や
ナウ 蓑虫の泣いてゐるのは空耳か　雪
パッチワークのリュック背負ひて　俊
参道の流行りのカフェのパンケーキ　雪
みんな親切向う三軒　や
花筵どうせこの世はなるやうに　有
風船売になりたかつたな　巳

連衆　松島待雪　島村暁巳　中林あや
三木俊子　國司正夫

入笠山の座

歌仙「眠り落ちし」　鈴木千恵子　捌

眠り落ちし山の灯月は天心に　芦丈仏
道のしるべと色変へぬ松　千恵子
無花果のパウンドケーキ切り分けて　香織
テーブル囲む髭面の増え　美子
腹芸で賑やかになる誕生日　富子
でんでん虫ののの字描ける　健
ウ 齢よりちよつと派手めに更衣　酔山
君にもらつた優しさの鍵　織
告白は谷を挟んでヨーデルで　山

AIの世の恋はどうなる　富
居つきたるわがままな猫大あくび　山
銭湯の棚この場所と決め　健
時の鐘数へる路に寒の月　織
ジョギングの息白き内科医　仝
CMのとほりに効けば悩みなく　富
一億円の使ひ放題　健
基礎研究ノーベル賞に花万朶　美
復活祭に集ふ園児ら　織
ナオ 揚雲雀遠き野面をまつすぐに　富
撮り鉄仲間じつと動かず　山
訪ねゆくスコットランド安酒場　織
夢の中から突如ネッシー　健
短夜に仇名飛び交ふ同期会　織
離婚したのと彼にささやく　美
すれ違ひ匂ひで分かる好きな人　山
ポットで淹れる紅茶格別　富
ヒンズー教牛がどでんと寝そべつて　山
変はりばえせぬ大臣の顔　織
有明に朝刊の音待ち兼ねる　富
美術展へは割引で行く　山
ナウ 団栗のころころころと池の中　健
柱時計のねぢを巻く爺　織
数独のアプリをダウンロードして　美
頭陀袋には知恵がいつぱい　健
墨蹟に人柄偲ぶ花の軸　千
越後の里にしやぼん玉吹く　美

連衆　平林香織　小久保美子　名古屋富子
由井健　吉田酔山

例年、十月の猫蓑会例会は芭蕉忌・明雅忌として開催される。しかし今年は先師、芋庵（からむしあん）根津芦丈翁の五十回忌にあたるので、芭蕉忌正式俳諧興行に続く実作会は、芦丈翁五十回忌興行として開催、ご来賓の和田忠勝、小林静司、川野蓼艸の三氏にご同座いただき、芦丈翁発句による脇起歌仙八巻を満尾した。三氏には正式俳諧にもご臨席いただいた。左の写真は、正式俳諧終了後の記念撮影。

ご来賓の前列左より三人目から、和田忠勝、小林静司、川野蓼艸の三氏を、正式俳諧の配役全員で囲む

平成三十年俳諧芭蕉忌　正式俳諧
俳諧連歌脇起二十韻

白菊の眼に立てみる塵もなし　翁
　伽羅の香薫る爽籟の庵　孝子
月の客そぞろ歩きのひとときに　良子
　バイクでくだる坂の緩やか　壽子
ウ デリバリーマルゲリータを切り分けて　千惠子
　恋の獲物は甘い大物　あや
十八のわが純情よさやうなら　了斎
　突如轟く梅雨の雷　雅子
夏袴居合稽古の剣先に　酔山
　峨々たる峰を描く墨絵師　遊眠
ナオ 山陰線猫もまどろむ駅舎にて　香織
　あしたは雪と夢のささやき　転石
あかぎれの君が指を撫づる月　美友紀
　やきもち気分ほぐすリキュール　待雪
村はづれお地蔵様のふふむ笑み　徹心
　下校の児達しばし道草　塁
ナウ アンダースロー水切る数を競ひ合ひ　忠史
　春の帽子のやはらかな色　有子
文机に花びらの舞ふ二三片　秀樹
　虻の羽音のリズム軽やか　執筆

平成三十年十月十八日　首尾
江東区芭蕉記念館に於て興行

正式俳諧配役

宗匠	生生庵秀樹
脇宗匠	本屋　良子
副宗匠	鈴木千惠子
執筆	若林　文伸
知司	内田　遊眠
副知司	平林　香織
座見	根津　忠史
座配	佐藤　徹心
花司	林　転石
香元	松島　待雪
配硯	奥野美友紀
仝	竹中　塁
老長	杉山　壽子

挙句まで巻き終えたあと、執筆が懐紙を綴じる。左は宗匠、右は老長

祖父、芋庵芦丈の五十回忌に

根津忠史

何年かぶり、珍しい程の大雪の降った昭和四十三年二月十四日、祖父は亡くなった。ちょうど五十年を経たのを機に、祖父について父母に聞いたことも含めて、思い出すことを忘れないうちに記してみることにした。

まず、長生きの要因は、丈夫な歯で何でもよく食べたことだったと思う。

特に鰻が大好きで、自分で天竜川に簗や筌(うけ)を仕掛けて捕っていたという。前回披露した掛軸、

銀漢や四囲の山昼の高さ無き

眠り落ちし山の灯月は天心に

これらは、真夜中、鰻漁をしていた時に詠んだ句だと、父から聞いた。

祖父の夕飯に、美味しそうなかば焼きの、胴の部分の肉厚の格好いい切り身を出したところ、「鰻はしっぽの方に栄養があるだだ」と丼を持って、取り換えてくれと台所に来たことがあった、と母から聞いた。

あるお宅にお邪魔したときに「先生は何がお好きですか」と問われ「鰻が好きで三食でもいいだ」と答えたところ、「逗留した三日間、三度三度鰻ばっかでさすがに参っただ」と笑っていたことがあった。

あまり同じお宅にお世話になったことはないと聞いているので、これも前回披露した、

鶯の三つ音を三朝軒先に

という句は、そのお宅での情景ではないかと考えている。

また、歯の丈夫な話としては、我が家では父がピーナッツを大好きだったため、節分には殻つきの落花生を撒いていたが、ちょうど夕方来た祖父に「節分には豆だだよ」と言われ、急ぎ隣から貰ってきた硬い炒り豆を、ポリポリ囓っていたことがあった。

晩年、寝ていることが多くなった頃、天井の蠅が友達になって、

蠅一匹汝も灯火親しいか

この色紙は、現在我が家の座敷に掲げてある。

その後の句は、棺前興行の立句、

冬うらら死に下手昼も寝てばかり

九十四歳まで長生きできたことで、最高の理解者、東先生に巡り会うことが叶い、五十年を経た今日の、俳諧の復興、隆盛を喜んでいることと思う。

高校の頃、俳句の宿題が出たときに、祖父が我が家でのんびりしていたので、

鶯の鳴く参道の杉並木

の句を見てもらった。「十七文字しかないんだから、大事にしにゃ駄目だだよ、

鶯の鳴く参道の杉暗し

とすれば、年を経た立派な杉の枝ぶりまで詠みこめるだ」

これが、句について一生でたった一度だけ教わった貴重な体験であった。今思うと、この二句の違いが俳句と発句の違いで、奥の細道の最上川の「早し」と「涼し」の差に通じるのかな、などと考えている。

連句の世界のますますの発展を祈念して、思い出すまま祖父について記した。

江戸時代陶磁器散歩

宇田川肇

私は遺跡発掘調査業務に携わるようになって二十年以上になります。遺跡調査といっても都心部の現場が多いので、江戸時代、特に幕末期の武家屋敷などを主に手掛けています。江戸時代の遺跡を掘っておりますと、たくさんの陶磁器が出土します（実は土器も大量に出ます。江戸文化は土器文化の色合いも濃いのです）。そのため、多少は陶磁器に詳しくなりました。そこで、社員研修用に購入した陶磁器の中からいくつかを見繕って、皆さまに紙上陶磁器散歩を楽しんでいただきたいと思います。

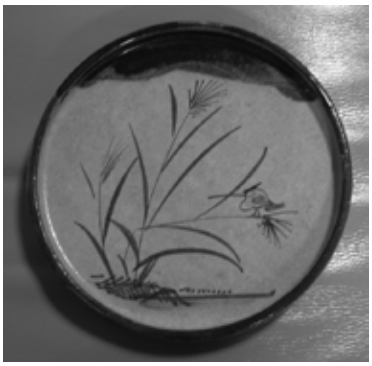
●織部焼行灯皿

まず紹介させていただきますのは、瀬戸・美

濃地方でおよそ二百年前に製作された行灯（行燈）皿です。江戸時代には蝋燭はとても高価なもので、一部の上流階級でも結婚、葬式など特別な時にしか用いることができませんでした。一般庶民や下級武士たちが夜業などするときは、灯明皿の周りを紙で囲った行灯を用いていました。菜種油、あるいは魚油を灯明皿に注いで、灯心を置き、火を点します。六十ワット電球の五十分の一程度の明るさですが、それでも当時は明かりが灯せるだけ贅沢なものでありました。貴重な灯油の一部は、毛細管現象よって灯心を伝って下にこぼれてきますので、油受け用の皿として別の皿を置きました。これが行灯皿です。

滴る油の受け皿、という用途からすれば、この皿はまったくの消耗品なのですが、その器面には様々な絵が描かれています。写真にある皿の絵柄は秋草に小禽でしょうか、風に揺れる草を背景に、少々下膨れの愛らしい小鳥が一枝に止まる姿は、何ともいえない味わいを醸し出し、

●織部焼行灯皿

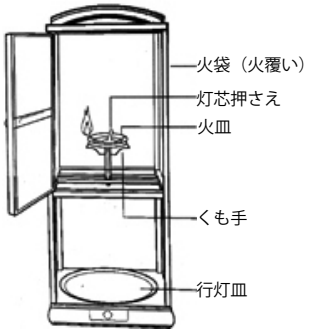


趣深い秋の川原風景を現出させています。織部焼ならではの濃い緑釉が、邪魔にならない程度に上方に配置され、黄土色のふっくらした地肌と良いコントラストを成しています。

とても完成度の高い絵柄だと思いますが、この絵は行灯に火を点す一瞬だけしか、人の目には入りません。灯台下暗しとは言いますが、最も光の当たらない場所ですし、油さしの瓶を置いてしまえば昼間だって絵は見えません。すぐに煤や油で汚れることなどを考えれば、絵付などするだけ無駄と思われます。それを承知でなお一筆施すというところが「粋」というものなのかもしれません。

織部焼とは実に奇妙な焼き物で、安土桃山時代末期の十七世紀初頭から十年ほど製作されて、忽然と姿を消しました。その原因はよく分かってはいませんが、織部焼を後援していた古田織部が徳川家への謀反を疑われ、自刃して果てたことから、徳川家への忖度もあって意図的に織部風の意匠や技法が廃棄されたのではないかと言われています。しかしながら織部風の意匠は密かに愛されていたようで、技法が消えて二百年近くたってから、尾張藩が織部焼を復興させました。十八世紀後葉から十九世中葉まで、瀬戸・美濃地方で焼かれた織部焼を「復興織部」といいます。復興織部は全国に売れたようで、尾張藩の貴重な財源の一つになりました。織部焼はいまでも愛されていて、瀬戸・美濃焼窯元でも主要商品の一つだと聞いたことがあります。

●行灯の各部の名称
行灯の最下部に行灯皿が置かれる。



●広東碗

さて、左の写真に写っているのは、口径十五センチ、高さ八センチ程度の磁器碗です。蓋と体部の外面には松竹梅と蝙蝠が描かれています。蝙蝠というと何やらおどろおどろしいような感じがしますが、中国では「福」と蝙蝠の「蝠」が同じ発音なので、古くから蝙蝠文は吉祥文として使われてきました。日本では蝙蝠はあくま

●広東碗

で「コウモリ」ですので、十八世紀後葉に中国趣味が庶民の間にも浸透するまで出現しませんでした。この器の中国趣味は絵柄だけではありません。碗を横から見ると、寸詰まりのメガホンのような、今の私たちにはあまりなじみのない形をしているとは思いませんか？　なにやら異国の雰囲気を漂わせるこの磁器碗は「広東碗（かんとんわん）」と呼ばれているものですが、中国製ではありません。中国風のデザインの碗を肥前（有田・古伊万里）か瀬戸で焼いたものです。十八世紀後葉から十九世紀前葉にかけて瀬戸や肥前で大量に生産されました。

広東碗は中国風の形をしていますが、中国はおろか東南アジアでも出土例がほとんどありません。わりと新しい時代のものはあるようです。どうも江戸後期に流行した中国趣味の影響を受けて、江戸時代の人達が勝手に中国風のイメージを器の形にして創ってしまったもののようです。長崎の出島付近での出土例が多いそうですから、もしかしたら中国風の碗を中国産として、中国すなわち清朝や、あるいは東南アジアに売り捌いていたのかもしれません。江戸幕府は、対外貿易については長崎をはじめとする僅かな窓口に限定して管理したと言われていましたが、最近の研究により加賀藩や薩摩藩、佐賀藩など、海に面した藩は半ば公然と密貿易をしていたことがわかっています。

●右頁下の広東碗を上から見る
中央部に蝙蝠が描かれています。中国風喫茶は急須を使わず、茶碗に茶葉を入れ、蓋でお茶を避けながら茶碗から直接飲むので、蓋をつけて中国風を気取っています。

広東碗は日本全国で流行し、莫大な量が生産されましたが、幕末期には衰退し、明治期にはまったく製作されなくなりました。その理由としては中国趣味が飽きられたこと、飯碗にしても茶碗にしても、手になじむ形ではないので使い勝手が悪いこと、より簡単に作れる器形が好まれたこと、などがあげられます。恐らく、中国趣味が飽きられたことを主因として、複合的な要因が重なり、一時代を席巻した広東碗は消えていったのだと思います。

一度歴史の表舞台から消えて二百年の時を超えて復活し、現在も親しまれている織部焼。莫大な量が製作されながらわずか五十年たらずで途絶し、現在には継承されなかった広東碗（江戸時代中期に「半球碗」が製作されて同じように消えるのですが、これは江戸時代中期に生活様式の変化が起こったからではないかと考えられています）。この両者の違いは何だったのでしょうか？　愚見を述べれば、広東碗は江戸時代人の中国幻想が生み出した一過性の流行に過ぎなかったが、織部焼の意匠には何かしら普遍的な美が表現されているので、常に復活し続ける潜在力があるのではないでしょうか。

私は、連句のお仲間に入れていただいてからまだ日を経ていないので、よくは分からないのですが、「不易流行」とは広東碗と織部焼の関係に似ている側面もあるのかな、と思ったりします。

ちなみに、芭蕉が活躍した十七世紀は、陶磁器の産地も器種も限られていました。芭蕉はほとんど木製品で食事をしていたと思います。蕪村が生きた十八世紀後半に、陶磁器の生産が爆発的に増加しますが、江戸で江戸時代らしい文化が一般化するのは、一茶の晩年に相当する十九世紀初頭以降になります。同じ江戸時代とは言っても、芭蕉と蕪村と一茶では、流通する物資の量や種類が格段に異なり、人々の心性も大きく異なっていると思います。そんな考古学的立場に立って三巨人の句を味わってみると、何かしら新たな発見があるかもしれません。

●日頃扱っている出土遺物あれこれ
800℃程度の低温で釉薬を掛けない焼き物を「土器」といいます。江戸時代は日用品のかなりの部分を土器が占めていました。写真手前は焼塩壺（粗塩は不純物を抜くため、壺に入れて焼きます）とその蓋、奥に瓦灯皿（終夜灯みたいなもの）火鉢があります。

第百四十二回猫蓑会例会
平成二十九年度総会作品　1～4

岩煙草の座

歌仙「芭蕉稲荷」　中林あや　捌

溽暑かな芭蕉稲荷を幡おほふ　あや
　片陰選び駅からの道　忠史
異国風螺旋階段のぼりゐて　美智子
　二列に並ぶ紺の制服　ひろみ
月の宵鳥のモビールかたかたと　鄭和
　ピーナッツには塩を振りかけ　史
ウ 遅れきて上司の隣秋狂言　智
　口紅の色誉める耳元　み
鍵なんかいらない僕の秘密部屋　和
　嫌がつてゐる猫に鈴付け　や
支持率はぐんぐん下がつてゆくらしい　史
　具の貧弱なこの根深汁　み
クリスマスローズを照らす月明り　仝
　大リーガーの夢を忘れず　史
一回で踊り覚える保育園　仝
　集合写真むつとしてをり　や
花筵はや空つぽか樽の酒　智
　椅子にもたれて春の虹見る　史
ナオ 出開帳自転車で行く坂の町　和
　ドローン飛ばしテレビ中継　み
将軍のスポークスマン声高に　史
　箪笥預金が安全と婆　み
ちよつとだけ透けた簾は覗きたい　和
代はりばんこに蛇舐める閨　や
おさだまり指で数へる背のほくろ　和
　遠野の里にあまた伝説　史
ボランティア終へて住みつく若きあり　和
　鼻をこすればまたもくつさめ　智
後の月山海珍味用意でき　史
　くの字への字に雁渡る頃　仝
ナウ まああおしやれオートクチュール着たかかし　や
　直立不動国歌斉唱　史
船頭の操る棹の巧みなり　み
　あちらこちらに広告を貼る　智
良きことのありさうと思ふ花の旅　や
　ゆつくり揺れるふらここへ風　和

連衆　根津忠史　聖成美智子　江津ひろみ
　高山鄭和

駒草の座

歌仙「色留の」　本屋良子　捌

悼　梅香庵宗匠

色留の似合ふ宗匠夏座鋪　良子
　静かに咲ける鉢の夕顔　酔山
新刊本いつものやうに取り寄せて　弘子
　焙じ茶を淹れゆるり味はふ　未悠
月の下釣果を競ふ山の宿　徹心
　強弱つけて猪おどし鳴る　弘
ウ 至福なり温めの酒と新豆腐　山
　悪友なれど心通はす　良
キスよりもハグがこの頃好きなのね　弘
ますます増える女性オンリー　心
延暦寺修行に入る墨衣　悠
　寝惚け眼の消防士ゆく　山
お歳暮が月光を浴び玄関に　仝
　スマホがあつて私がゐる　弘
世界中旅するこころ特番で　悠
　元気ですかと伯母の絵手紙　山
武士の植ゑし弘前花大樹　弘
　撮影現場駆ける若駒　悠
ナオ 赤青黄ゲレンデ飾る春スキー　心
　父の雄姿に少しにんまり　弘
遺言書聞かぬ名前にみな唖然　心
　コメディアンでも作家でもある　山
プリウスにアルファロメオにメルセデス　仝
　地の果までもお気に召すまま　心
きのふまで別の男に抱かれてた　弘
　闇に消えゆく山笠の衆　悠
立入りを頑と許さぬ神の島　山
　雀ちゆんちゆん烏かあかあ　良
黄落の道を歩けば月円か　悠
　窓の奥より匂ふどぶろく　弘
ナウ 猫じやらし一輪挿しが終の家　心
　ラヂオ体操医師の勧めで　山
廃校に寝袋集ふクラス会　心
　鐘の音ゐると鳴らす幼ら　悠
夢かとも花繚乱の能舞台　良
　彼方へと飛ぶ二羽の白蝶　悠

連衆　吉田酔山　市野沢弘子　棚町未愁
　佐藤徹心

風露草の座

歌仙「凌霄花」　佐々木有子　捌

凌霄花や久しぶりねと弾む声　有子
涼み舟ゆく街中の川　美奈子
玉露茶のペットボトルを飲み干して　文子
さてこれからと立ち上がる人　路子
朝の月動物園の動き出す　敦子
色無き風の過ぎてゆくなり　路
ウ 秋袷襟かき合はす粋な所作　文
稽古帰りにちよつと寄る店　奈
背中から抱きすくめられ名を当てる　仝
遠距離なればこそのわくわく　敦
高らかに塔のカリヨン鳴り響き　文
雪蛍舞ふ月細き杜　奈
凍上のＡＩ時代迫る村　路
絶滅危惧かわれら人類　敦
将棋塾入門させる親が増え　文
役者四歳初の宙乗　仝
咲き誇る花へ花守笑み秘めて　路
転勤辞令もらふうららか　敦
ナオ 蝌蚪の群寺苑の池にひしめける　文
ブラスバンドの揃ふ足並　奈
残額が無いと改札赤ランプ　敦
決算書には利息二円と　路
矜持てふ字は読めぬ字になりました　奈

平成二十九年七月十九日
於　江東区芭蕉記念館

少し皺寄る腕の刺青　文
網走の受刑者を訪ふ海霧深し　仝
綺麗でゐたいまた逢へるまで　奈
浮気ならいつぱいしたよ夢の中　路
自由自在に飛ばすドローン　敦
月今宵王宮回廊燦然と　文
夜学生らが呷る火の酒　奈
ナウ 鎌祝湯立て飯炊く一斗釜　路
すこし調子が悪ければ医者　敦
番組表印をつけてテレビ見る　仝
烏仔烏並ぶ電線　奈
新しき研究棟に飛花落花　有
行く春惜しみ故郷の山　路

連衆　鈴木美奈子　橘　文子　倉本路子
武井敦子

綿菅の座

歌仙「初茄子」　三木俊子　捌

挽ぎ立ての重みうれしき初茄子　俊子
驟雨過ぎたる風の涼しさ　孝子
書店には手描きポップの踊るらん　千恵子
ランドセル揺れ駆けて行く児等　久美
月の街左へ切れば海の見え　一枝
さんまじゅーじゅー民宿の膳　孝
ウ 爽やかに耳から入る英単語　仝
惚れたがゆゑに老いの手習ひ　千
姑も矯正ブラをそつと着け　美

透明人間一度なりたい　千
国会に呼んでもらへば話します　枝
太鼓叩いて猿曳の芸　孝
峡にさす貧しき月に寒念仏　仝
今日の疲れをほどく熱燗　千
スニーカージッパー付で軽やかに　富子
幾世経ぬらん濠の石垣　孝
添乗員旗持つ列に花吹雪　千
春手袋で少しすまして　枝
ナオ ご隠居の法螺を笑ふか遠蛙　孝
株式市場乱高下する　美
タンカーの喫水線の紅著く　孝
罵声切なく募る望郷　仝
あの恋はほうたるの舞ふ宵なりき　千
浴衣の衿の抜き加減良し　富
淑女とは思へぬ肌のテクニック　仝
教授の地位も惜しくなかつた　孝
人並みに奢れやと言ふ浪人生　美
二度づけ禁止串カツのたれ　枝
野良猫が仰ぐ廂のお月さま　富
大聖堂をよぎる雁がね　美
ナウ ゆく秋のケルトの墓碑を読むは誰　枝
家族でめくる思ひ出スケッチ　富
目薬は沁みぬと効いた気がしない　千
固く絞つて拭ふ雑巾　孝
夕影の梵鐘を聴く花筵　俊
夢と現に透ける陽炎　枝

連衆　坂本孝子　鈴木千恵子　斎藤久美
西田一枝　名古屋富子

薄雪草の座

歌仙「白服の」　奥野美友紀　捌

白服の丈も短くなりにけり　美友紀
青葉の風の吹入れる部屋　郁子
ジェット機は山稜めざし飛び立ちて　秀樹
ペットボトルのお茶を飲み干す　文伸
たもとほる池の水面に月の影　雅子
声は遥かに菱取りの舟　転石
ウ 秋の宿討論会の盛り上り　雅
迷つた時は小首かしげる　石
けふもまた犬の散歩で出逢ふ君　樹
ミスキャンパスを競ひたるとか　仝
CAもアナウンサーも狭き門　雅
教会の鐘遠く優しく　郁
純米酒好みは兄と同じにて　伸
おでんけとばし鍋囲む月　仝
腹筋は三百回を日課とす　紀
低処高思と額の四文字　伸
誘ひ合ひ京の名刹花盛り　郁
甘味いかがとうららかな午後　雅
ナオ 告天子疲れも知らで歌ふらん　伸
急降下する与党支持率　雅
ほねつぎが副木の寸をはかりかね　石
こんなところにアフリカの人　雅
深視力前後感覚優れたる　伸

鰻と穴子味の違ひは　石
ぬめぬめとぬるぬるとするきもだめし　雅
逃げ足速しランナーの彼　伸
結婚は切札になどなりません　紀
鼓を打つてつける序破急　雅
月渡る着背長重き木曽殿に　雅
信州名物これが蜂の仔　石
ナウ 海嬴廻し近頃とみに進化して　雅
発掘すれば石器いろいろ　伸
赤道上衛星軌道狂ひなく　石
世のため天寿全うの医師　樹
花明り留守番の子に置き手紙　雅
広き公園揺れるぶらんこ　紀
連衆　東　郁子　青木秀樹　若林文伸
武井雅子　林　転石　執筆

岩蓼の座

歌仙「初蝉や」　高塚　霞　捌

初蝉や朝の陽を浴び芭蕉庵　霞
人影しばし休む緑陰　健
集まりに落着きの茶を供すらん　淳子
ＰＴＡにめづらしき顔　蕉肝
中天のまんまる月を仰ぎぬて　昭
水澄むところ朽ちる舟杭　淳
ウ 銭湯ののれん分け入り秋袷　健
細き足首ワニの刺青　肝
騙されて騙していまだ続きをり　淳

万世一系時に点線　肝
マイク持ち氷川きよしを熱唱す　昭
老若問はず数へ日の月　淳
暗闇に王子の狐火を灯し　健
バベルの塔は跡形もなく　肝
友誘ひ世界一周企画して　昭
掛りはいつも私持ちなの　肝
見渡せば須彌山までも花の雲　仝
春風の中靴の小さき　霞
ナオ 思ひ絶つ如く鞦韆ひたすらに　淳
いぢめはないとしらを切る仁　肝
警策のぴしりと決まる昼下り　健
土用鰻を酒の肴に　昭
帰省子に食べよ飲めよと母忙し　淳
井戸掘る技術海外へ行く　肝
百五歳生涯現役通す人　淳
お医者ごつこはがきの楽しみ　健
いつぱしにネクタイドレス子沢山　淳
スマホ見たまま振り向きもせず　仝
月照らす将棋の盤は王手飛車　健
寒露いよいよ繁き暁　肝
ナウ 地芝居の先代萩に貰ひ泣き　淳
身内を守るトランプの情　肝
ＴＰＰパリの合意も反故にして　昭
真珠の夢は海の深くに　淳
花粲粲産土神へ宮参り　霞
大の字になる蒲公英の野辺　昭
連衆　由井　健　上月淳子　近藤蕉肝
松原　昭

岐阜県文芸祭に参加して

鈴木千惠子

この年の夏も恒例で、友人の閻小妹（えんしょうまい）さんの原村（長野県）の山荘に出掛けた。そして初めて縄文のビーナスを所蔵する尖石考古館を訪ねた。その場でYさんが、先の尖った縄文土器は、地面に刺して月の雫を集めるという呪術的な用途があったという説を教えてくれた。私は火焔土器で月の雫を集めたら素敵だなと思った。三週間後の鎌倉で巻いた一巻の発句は「繊月の雫……」とする。

日ごろ短歌行を巻く機会は少ない。しかし、岐阜県文芸祭では短歌行の募集をしている。また、文芸祭の表彰式後には、部門別の審査員による講評会が開催される。今回の審査委員は大野鵠士。言わずとしれた獅子門道統第四十一世であり、明雅先生の信州大学での教え子であり、私にとっては二村文人さんの先輩である。作品応募の後、年が明けて嬉しいことに佳作入賞の知らせが届いた。

せっかくなので前の夜は、獅子門の皆さんと居酒屋わんで交流を深める。当日会場のＯＫＢふれあい会館に着くと、やはり入選作「時鳥」の巻・栗原和宏捌の連衆の山中たけをさんの姿があった。たけをさんは父君と一緒だった。父君はカレーを食べていらした。桃雅会の宮川尚子さんとも合流する。表彰式が無事に済むと部門別の部屋に分かれることとなった。

前もって審査員の古田了さんからは「大学の厩舎に花の降りしきる」「三号棟はかげろふの中」が好きなところ、などという評をいただいていた。連句部門参加者十数名の自己紹介の後、いよいよ作品講評会である。

そこでは「作品に新しみを持たせることと、式目を守ることのバランスが難しい」というたけをさんの発言に対して、「連句とはそもそも分裂するものを抱え込んだ文芸では」という大野さんの言葉が印象に残った。道統は連句は奔放でもダメだし、小さく固まってもダメだとおっしゃった。また式目の決まりとしての作法に目が行きがちであるけれども、作法（さほう）とは本来作法（さくほう）であって、文辞を整えるためのポジティブな方法なのだとの言葉も示唆的であった。

講評会の中で「新しい人にいかに連句を普及するか」「若年層を取り込むにはどうしたらよいか」といった課題に結論は出なかったけれども、連句について参加者で真剣に話し合っているその空間はとても貴重に思えた。

帰途は尚子さんの案内でたけをさんと和宏さんと、名古屋のエスカでひつまぶしをいただいた。私にとっては「わん」から「ひつまぶし」までが晴れの時間で、まさに「祭」の岐阜行きであった。

短歌行「繊月の雫」

鈴木千惠子　捌

繊月の雫を受ける火焔土器　鈴木千惠子
萩のこぼるる山里の苑　佐々木有子
天守見に新涼の坂上り来て　聖成美智子
ブレイクダンス踊る若人　千
ウ　刻打てど鳩の首出ぬ鳩時計　有
待合室で雑誌ぱらぱら　智
お忍びのデート揃ひのサングラス　千
プールで抱擁一糸まとはず　有
聖母のごと赤子に乳をふふませて　智
けふは太郎が飼育当番　千
大学の厩舎に花の降りしきる　有
三号棟はかげろふの中　智
ナオ　暮の春メニエル病のいつも出て　千
コーヒーカップ僕は乗れない　有
公園で科白をさらふ名脇役　智
帽子から恋ひよいと手品師　千
トランペット結婚式の始まりぬ　有
招待席にミスユニバース　智
初場所の高櫓には月の笑む　仝
辛党なれど好きな鯛焼　千
ナウ　焦げ目なき人生なんてつまらない　有
拡大鏡で掌を見る　仝
切通し抜けて万朶の花に遇ふ　千
都はるけく鶯の声　智

平成三十年八月二十七日　首尾
於　鎌倉別邸ソサエティ

第百四十三回猫蓑会例会
明雅忌興行作品 1～5

稲雀の座

源心「銀杏黄葉」　武井雅子　捌

父眠る銀杏黄葉の故郷かな　雅子
天守にかかる美しき夕月　郁子
虫の声聞きつつ楽譜書くならん　文子
厚焼きたまご出来は上々　徹心
ウ 急ぐでもなく鈍行でとことこと　秀樹
スノーボードを手とり足とり　心
晩三吉剥いてもらつた太い指　文
なんでもやつてくれるＡＩ　郁
天気予報晴れのち曇り時に雨　心
全力疾走野球少年　郁
アメリカに憧れでかい夢抱く　文
二枚重ねのパンケーキ食べ　仝
男同士花の盛りを嬉々として　樹
お遍路さんに軽く挨拶　雅
ナオ 猫の子と龍馬を愛し半世紀　樹
太平洋を眺め一献　文
知らぬ間に大陸棚に滑走路　心
黙つてゐては意志は通ぜず　文
着ぶくれて化粧の厚い異星人　心
後か先かは問はぬ子宝　仝
天丼でまたも鼠が運動会　郁
とんだ所に黴の菌棲む　樹
夏の霜玲瓏の富士仰ぎをり　文
ういらう売の見事言立て　仝
ナウ 誘はれて古都の名園尋め歩き　郁
クイーンの館鴉褐色　文
島と島繋ぐフェリーの花便り　雅
春の炬燵に読みふける本　執筆

連衆　東郁子　橘文子　佐藤徹心
青木秀樹

頭高の座

源心「露の世も」　鈴木了斎　捌

露の世も恋の句も愛でたまひけり　了斎
名残の月に偲ぶ面影　弘子
花野から山々の穂を見渡して　アンズ
歩む旅人道標を越え　鑑
ウ 終発と始発の時間記す板　芙美
今夜は来てと無理言つてみる　弘
浮気先からの電話とばれてをり　斎
ウィンクに似てただのまばたき　ア
故郷は凩の吹きすさぶ頃　鑑
たまの便りに鶴来るの文字　美
ドンペリニョンどんどん空ける日もあらん　ア
聴診器から爆音がする　美
発電所廃墟に花の降り止まず　弘
仔猫拾つて付ける名は「海」　斎
ナオ 生徒らの妙に静かな春の午後　鑑
懺悔室への順番は次　弘
またしても外反母趾が疼き出し　ア
火玉落ち際シュンシュンと散る　美
夏幾度来てもあなたを待つてゐた　斎
静寂(しじま)のなかに二人吐く息　鑑
各賞を総嘗めにする映画祭　弘
元祖と本家どれがオマージュ　ア
雪蛍いつのまに消え月繊(ほそ)し　美
こけしのやうな観音を彫る　ア
ナウ 米と金なくとも友に恵まれて　弘
どんな街にも古き抜け路地　鑑
花前線追うて自転車漕ぎ続け　斎
うららかに弾く無伴奏チェロ　美

連衆　松原弘子　松島アンズ　荒木鑑
間瀬芙美

連雀の座

源心「穂芒や」　鈴木千恵子　捌

穂芒や光れば思ふ白き鬚　千恵子
月を目指すか渡るかりがね　敏枝
零余子飯ちやうど炊けたと声掛けて　鄭和
ボリュームあげてボサノバに酔ひ　あき子
ウ デパートの歳末セールせはしなく　霞
聖樹の下に運命の彼　昭
覚悟して阿修羅の道を突き進む　枝
五輪に向かふ若者の日々　あ
年号のかはるを三度経験し　霞
宇宙旅行も今やローンで　仝
ＧＰＳへそくりの場所見つけだす　和
癌の兆しに静かなる医師　仝
夢のごと吉野の奥の花千本　昭
朧の闇に紛れたるまま　霞

ナオ やや児背に家族総出の大掃除　枝
パラオの珍味揚げた蝙蝠　和
ディズニーの想ひははるか海の詩　仝
眠りの森の姫になりたい　霞
七変化七つの恋の色に染む　仝
君の耳朶とても柔らか　昭
見あげれば母校古りたる丘の上　枝
風にまぎれて低きハミング　霞
紙漉の工房に入る月の影　あ
土鈴の兎棚に鎮座す　霞
ナウ 天皇のさ庭で糞を調査して　和
菊正宗の極上を酌む　千
船頭の櫂のしづくに花筏　霞
ブーメラン投げくるり麗か　あ

連衆　箭内敏枝　髙山鄭和　岩崎あき子
高塚　霞　松原　昭

花鶏の座

源心「安曇野の」　**島村暁巳**　捌

安曇野の月明に立つ師を想ふ　暁巳
振り向けば降る櫟(くぬぎとち)の実　弘子
ちちろ虫居間のどこかにふと鳴きて　未悠
漢字のドリル残り一問　蓉子
ウ 炉開にナツメロ友と合唱し　泉子
うなじのほくろとしもやけに惚れ　文伸
来ぬ理由(わけ)を箇条書する馬鹿な奴　泉
何のごみだかポケットの中　蓉
俊足を生かして決める三塁打　伸

選挙応援西に東に　弘
銅像はいつの間にやら倒されて　悠
ボリショイ劇場お披露目に遇ふ　泉
花の雨大和古刹の甍にて　伸
春の外套羽織る漱石　悠
ナオ 暮遅し机の傷も補修され　泉
さつきのおやつ医長手作り　弘
漢方の効能書をパソコンに　蓉
ラグビーチケットコンビニで買ふ　弘
束の間の善行声高社会鍋　泉
あなたに逢へば疼く古疵　悠
四畳半カレーの匂ふ部屋でした　蓉
印度が発見零の概念　巳
熱風に砂漠の月は生きてるか　泉
長距離ラリー短夜の中　伸
ナウ 重力波伝達速度素早くて　蓉
〆の合図に挙げる杯　泉
再会を約し握手の花の下　巳
囀を聞く裏の里山　悠

連衆　市野沢弘子　棚町未悠　五味蓉子
青木泉子　若林文伸

菱喰の座

源心「虫時雨」　**上月淳子**　捌

虫時雨遺愛の庭に佇みて　淳子
十三夜ゆへ集ふ同胞　遊眠
薄野を吹く潮風の果もなし　蕉肝
贔屓と同じ名で猫を呼ぶ　美奈子

ウ トランプに妹誘ふ置炬燵　佐紀子
丹前羽織りすするお汁粉　美智子
若い衆「ひ」を「し」と訛りつつ口説く　奈
恋文横丁高くつく文　肝
袖の下やらぬもらつた泥仕合　眠
ノーベル賞は取りそこねたり　肝
伊達眼鏡買ひかへようか思案顔　佐
菩提寺にほど近き貸家　美
花の宴千年の雅の明らけく　肝
研出す蒔絵螺鈿うららか　眠
ナオ 広縁に寝転びて見る春の夢　佐
ひつじ雲追ひ子等は遠くに　眠
広島にぬかづく長の粗涙　肝
夾竹桃の道の辺に咲く　美
裏町の新内節にやつしたる　奈
痩せた背中をそつと引き寄せ　仝
おでこ付けストロー二本飲むジュース　佐
冒険映画動き出す席　肝
こなからを熱燗にして月と酌む　奈
鮟鱇鍋の肝を取りつこ　眠
ナウ 深山の神主なれど子沢山　肝
笹舟ゆるり進む小流れ　奈
新任教師迎へる村の花万朶　淳
安曇平に凧揚の人　奈

連衆　内田遊眠　近藤蕉肝　鈴木美奈子
間佐紀子　聖成美智子

平成二十九年十月十九日
於　江東区芭蕉記念館

第百四十三回猫蓑会例会
明雅忌興行作品 6～8

懸巣の座

源心「安曇野の色」 平林香織 捌

安曇野の色を問はまし暮の秋 香織
うす紫の月零す山 葵
芸術祭いつもの友の誘ひ来て 忠史
スマホの機種を変へる話題に 転石
ウ 大根を一気に抜ける吾娘強し 節子
いつまで待たす雪の街角 純子
アラフォーの長い睫毛に招かれて 石
右は富呼び左福呼ぶ 史
分去れに烏とまつた道祖神 仝
駐在さんの白い自転車 葵
母さんのへそくりいつも額の裏 節
温泉に飽き次は海外 純
花片は潮の渦目にひらひらと 史
牛の長鳴きのどらかに聞く 節
ナオ 蝶生るヘッドハントに成功し 純
受付嬢に何とAI 節
たのまうと将棋道場たたく門 葵
車懸りも鶴翼もあり 史
いやなやつ金で女を縛るとは 石
ホップステップ越える一線 葵
きぬぎぬに議員バッヂが転がつて 節
浦島太郎夢のあとさき 葵
月上る祭囃に汲む銘酒 節
西瓜の番は君に任せた 史
ナウ 菩提寺の和尚この頃昵懇に 石
読書に興じ乗りすごす駅 純
花踊るライヴステージ四重奏 織
東の空蜃気楼立つ 史

連衆 石川 葵 根津忠史 林 転石
長坂節子 近藤純子

鶺鴒の座

源心「秋小寒」 山田美代子 捌

添削を読みかへす夜や秋小寒 美代子
恩師偲びて仰ぎ見る月 正夫
柿を食べ城の由来を語るらん 路子
棚に地酒の並ぶ店奥 俊子
ウ 物音に覗けば何と熊がゐる 有子
サーカスが立つクリスマスには 仝
吹奏楽恋の芽生えは同パート 夫
しどろもどろでやつと告白 俊
三辺の長さ等しき三角形 有
最短の道選ぶ漱石 俊
お馴染みの猫にやさしい笑顔向け 路
いいねのスタンプ増える悦び 有
落人の村に花満つ峰の奥 路
耕す同士皆が知り合ひ 有
ナオ 囀におにぎり二個のお弁当 夫
候補者よりも目立つ応援 俊
少年の夢は世界の企業家に 代
蛇口の水のぽたぽたと漏れ 有
お見合は二十三回まだひとり 路
女スパイの偽りの愛 俊
甲板でいきなり抱くエーゲ海 夫
極楽浄土にゐる心地して 有
かぐや姫迎へる月は氷室まで 俊
かなぶんだけが苦手偉丈夫 路
ナウ 一年で身長伸びてつんつるてん 代
柱のキズの黒ずんで来る 夫
花筏流れかすかに動きつつ 俊
ゆつくり歩くうららかな浜 夫

連衆 國司正夫 倉本路子 三木俊子
佐々木有子

磯鷸の座

源心「東や」 由井 健 捌

東や明のいろはの雅かに 健
尾越の鴨のよぎる残月 孝子
運動会予行演習賑はひて 富子
貸自転車を駅に止め置く 敦子
ウ 肩先で暖簾分ければおでんの香 孝
隣の奴のマスク気になる 富
美人局なんと看板アナでした 一枝
不耕起栽培愛は逞し 仝
むくむくと雲か羊か地平線 孝
あやとりの糸取つて取られて 敦
新刊の売上ランクチェックする 仝
カルメンマキのやうなアンニュイ 枝
花の午后模型飛行機滑空し 富
蓬団子が此処の名物 孝

ナオ 裄丈を直して母の春袷　富
　忘れて帰る先生の杖　孝
始業前皇居一周ひと走り　敦
　ジャグジー銭湯冬をほこほこ　枝
落胤といはれた僧の懸想文　仝
　突如停電さらば閨事　富
マンネリを置き去りにしてサイドカー　枝
　銀のシェーカー粋な手捌き　孝
月涼し摩天楼へと上りゆく　敦
　噴水広場人の往来　富
ナウ 少年A世に出た時はクイズ王　孝
　テレビ体操朝な夕なに　富
健やかな笑顔の揃ふ花の席　健
　ぽかりと開く蛤の夢　敦

連衆　坂本孝子　名古屋富子　武井敦子
　西田一枝

執筆（右から二人目）の「文台捌き」で、水引を確かめる所作

平成二十九年俳諧芭蕉忌　正式俳諧
俳諧連歌脇起二十韻

折々に伊吹を見ては冬ごもり　翁
　ひときは色のしるき山茶花　転石
しじまより無伴奏チェロ緩やかに　美奈子
　風の抜けゆく頃に灯ともす　霞
ウ 連れだちて歩幅も揃ふ月の道　淳子
　分けあふ林檎これは恋かも　雅子
ナイフ小さし置き忘られてうそ寒く　了斎
　書記の座像の遠きまなざし　アンズ
橋開く瞬間を待つ街の川　文子
　ビルの屋上稲荷社に礼　千恵子
ナオ 女子会の氷金時溶けてゆく　香織
　蛍揺らすか愛の天秤　葵
ハバネラを歌ふカルメン身を焦し　遊眠
　ナビの案内ここで終了　節子
この香り父が好みの美禄にて　文伸
　月の細りに決める麦蒔　芙美
ナウ 楽しみはラマダン明けのおもてなし　忠史
　遅筆悪筆カードいろいろ　俊子
複葉機操る眼下花の雲　秀樹
　ひとあたたかに水の惑星　執筆

平成二十九年十月十九日　首尾
江東区芭蕉記念館に於て興行

平成二十九年十月十九日
於　江東区芭蕉記念館

正式俳諧配役

宗匠　生生庵秀樹
脇宗匠　鈴木　了斎
副宗匠　鈴木千恵子
執筆　西田　一枝
知司　若林　文伸
副知司　内田　遊眠
座見　根津　忠史
座配　三木　俊子
花司　林　転石
香元　松島アンズ
配硯　間瀬　芙美
仝　平林　香織
老長　橘　文子

正式俳諧を終え、配役全員で明雅先生の遺影を囲む

事務局だより

●前号掲載作品以後に開催された行事

・平成二十九年七月十九日（水曜日）
江東区芭蕉記念館にて第百四十二回猫蓑会例会（猫蓑会総会）が開催されました（前号既報）。当日の作品は**今号十二頁以下に掲載**しています。

・平成二十九年十月十九日（木曜日）
江東区芭蕉記念館にて第百四十三回猫蓑会例会（芭蕉忌・明雅忌）が開催されました（前号既報）。当日の作品は**今号十六頁以下に掲載**しています。

・平成三十年一月十四日（日曜日）
ホテルグランドヒル市ヶ谷にて、第百四十四回猫蓑会例会（平成三十年初懐紙）が開催されました。当日の作品は次号以降に掲載予定です。

・平成三十年四月二十六日（木曜日）
亀戸天神社にて、第百四十五回猫蓑会例会（藤祭奉納興行・奉納正式俳諧）が開催されました。当日の作品は次号以降に掲載予定です。

・平成三十年六月二十四日（日曜日）
新宿ワシントンホテル新館にて、第二十八回猫蓑会同人会総会が開催されました。当日の作品は次号以降に掲載予定です。

・平成三十年七月二十六日（木曜日）
江東区芭蕉記念館にて第百四十六回猫蓑会例会（猫蓑会総会）が開催されました。当日の作品は次号以降に掲載予定です。

・平成三十年十月十八日（木曜日）
江東区芭蕉記念館にて第百四十七回猫蓑会例会（根津芦丈翁五十回忌興行・芭蕉忌正式俳諧）が開催されました。当日の作品は**今号四頁以下に**、正式俳諧は**今号八頁に掲載**しています。

・平成三十一年一月二十六日（土曜日）
アルカディア市ヶ谷にて、第百四十八回猫蓑会例会（平成三十一年初懐紙）が開催されました。当日の作品は次号以降に掲載予定です。

・平成三十一年四月二十四日（水曜日）
亀戸天神社にて、第百四十九回猫蓑会例会（藤祭奉納興行・奉納正式俳諧興行）が開催されました。当日の作品は次号以降に掲載予定です。

・令和元年六月二十三日（日曜日）
新宿ワシントンホテル新館にて、第二十九回猫蓑会同人会総会が開催されました。当日の作品は次号以降に掲載予定です。

●今後の行事予定

・令和元年七月二十五日（木曜日） 江東区芭蕉記念館にて第百五十回猫蓑会例会（猫蓑会総会）開催を予定。

・令和元年十月二十四日（木曜日） 江東区芭蕉記念館にて第百五十一回猫蓑会例会(芭蕉忌正式俳諧・明雅忌）開催を予定。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・倉本路子様　平成三十年一月　一万円
・天の川連句会様　平成三十年一月　一万二千円
・匿名　平成三十年五月　五千円
・朱鷺の会様　平成三十年七月　一万円
・和田忠勝様（芦丈忌・明雅忌へ）
　平成三十年十月　一万円
・匿名　平成三十年十月　一万円
・内田麻子様　平成三十一年二月　八千円
・匿名　令和元年五月　五千円
基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
　猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●会員の転居

・式田香里　東京都杉並区内で転居
・平林香織　東京都台東区へ転居

●新同人

・平成二十九年度・佐藤徹心　鈴木英雄　御園魚彦
・平成三十年度・國司正夫　菅原通斉
・令和元年度・岩崎あき子　宇田川肇

●新入会員

・渡辺惠子　（東京都）　平成三十年三月入会
・角森宇蘭　（愛媛県）　平成三十年六月入会
・岡田雅昭　（東京都）　平成三十一年一月入会
・北龍志保子（きたきみ）　（東京都）　平成三十一年二月入会
・山本純人　（埼玉県）　平成三十一年三月入会
・杉本　聰　（富山県）　令和元年五月入会

●会員のご逝去

・同人の松原弘子様が五月十四日に永眠されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

●各種募吟にふるってご応募ください

・第二十八回岐阜県文芸祭　九月三十日締切　形式・短歌行（一人一巻）　応募料・千円

●前号訂正　二十頁　中段一行目　「平成二十年」を「平成三十年」に。

季刊　『猫蓑通信』第百十号
令和元年七月二十日発行
発行人　猫蓑会　青木秀樹
〒１８２・０００３
東京都調布市若葉町２・２１・１６
編集人　鈴木了斎
編集委員　奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・高塚霞・武井雅子・平林香織・御園魚彦（五十音順）
印刷所　印刷クリエート株式会社